

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第8号 水稻

発行日 平成28年10月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net/agri/>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

◆今年のイネ作りを振り返り、生産コストの低減に向けて総合的に栽培管理や技術内容の見直しを行いましょ。

1 本年の生育経過と作柄

育苗期は気温の変化が大きく、平年を大きく下回ったこともありましたが、全般に病害発生も少なく、良苗が確保されました。移植後の活着は良好で、分けつ期の生育も順調でした。7月中～下旬に低温となりましたが、出穂期は平年並となりました。

登熟期間は平年より気温が高く経過し、初期登熟は良好でしたが、成熟期は平年並でした。しかし、8月中旬～9月中旬にかけて立て続けに台風が襲来し、刈取作業は思うように進まず、刈取終期は平年よりも遅くなりました。

平成28年産水稻の9月15日現在における岩手県の作柄概況(農林水産省東北農政局、平成28年9月30日公表)は、作況指数101(ふるい目幅1.85mm)、10aあたり予想収量は540kg/10a、と見込まれます。台風や大雨など大きな気象災害に見舞われながらも、平年並の作柄でした。

平成28年産米の農産物検査結果(農林水産省、平成27年10月25日発表)ですが、岩手県の1等比率(9月30日現在)は、うるち玄米が97.6%、もち玄米が95.9%と全国トップレベルです。

2等以下に格付けされた主な理由は、①着色粒(カメムシ類)が最も多く(総検査数量に対する割合:1.8%)、②形質(その他)(同、0.2%)、③充実度(同、0.1%)の順となっています。

2 来年の作付けに向けて

今年度は重なる台風襲来により、成熟期を迎えても圃場状態が悪く、刈取作業が進みづらい年でした。

来年の水稻作付けに向けて、今年の栽培管理を振り返り、基本技術が励行できていたか、コスト低減の無駄はなかったか等について分析や検討を行いましょ。特に今年適期刈取できなかった圃場等では、溝切りや排水溝など明渠堀作業を行うなど、機械作業が可能な地耐力を得られるよう作業計画の見直しを行いましょ。

3 低コスト栽培技術

平成28年産の米価は、昨年に引き続き前年を上回って回復傾向を見せていますが、依然としてコスト低減に向けた努力は求められています。

稲作コストの低減に向けては、「資材費」の低減が効果的ですが、安易に必要な資材までも使用を控えると収量確保や良質米生産に悪影響を与えてしまいます。以下のような観点から総合的なコスト低減に努めましょ。

- ①作付面積の拡大(規模拡大) ⇒ 10aあたり生産費の低減
- ②生産量の増加(収量増加) ⇒ 60kgあたり生産費、生産物10,000円あたり生産費の低減
- ③販売単価の向上(有利販売) ⇒ 生産物10,000円あたり生産費の低減

また、コストとして意識にくい「労働費」の低減も、農地の集積や圃場の大区画化、省力的な栽培法や防除技術の選択などを併せて取組み、機械の利用率向上を図りましょ。

圃場管理システムの導入や耕起や施肥作業などの自動化、高精度化など各種のICT技術が農業分野に活用されてきており、県内でも農業用GPSシステムの導入に向けた取り組みが始まっています。県内外の先進事例などの動向に注目し、将来的な経営への活用などを今から考えてみましょ。